

大学学部における学生の性格特性の分析と今後の展望

青木真奈

要 旨

本研究は、東洋学園大学の3学部における学生の性格特性をエゴグラム（TEG II）を使ってそれぞれ分類し、差異を把握することを試み、その結果を基にした分析・考察を今後のより効果的な英語プログラムの設計に結びつけることに焦点を当てた。また学部別の分析を目的としているため、あえて学部名を表記している。

分析を通して、人間科学部は学部の特徴が比較的強く出ていることが明らかになった。具体的には、他人に気遣い、Noと言えないタイプに分類される学生が4割近くを占めた。グローバル・コミュニケーション学部は他の学部との差異が大きく見られなかったが、他学部には見られなかった特性の学生が一定数存在するという結果が示された。また、現代経営学部の学生は人間科学学部の学生より、論理的思考や理想の追求に関して強い傾向があることが示された。

これらの分析結果と併せて、その他のデータや教員へのヒアリングを用い、各学部における英語プログラム設計への提言を行った。

キーワード

エゴグラム、交流分析、性格特性、学部特性

I. はじめに

東洋学園大学は、現代経営学部、人間科学部、そしてグローバル・コミュニケーション学部というバランスの取れた3つの異なる分野の学部から成り立っており、学部所属ではない特別講師はその3学部全ての学生の必修英語科目を担当する。つまり、学部間の特色の差異を最も感じられる環境にあり、それゆえに、3学部が同じ到達目標を持ち、講義内容や評価の方法を共有することに違和感を覚えた経験のある講師が少なからず存在する。実際に、それぞれが感じた差異を講義にどのように反映させるか、その差異は共通しているのか否か、という話題が特別講師間で持ち上がることも少なくな。新保（2017）の言うように、性格自己分析のレポートの「結果や授業中における学生の行動を観察する中で、履修学生の所属学科によって、性格類型の分布にかなりの違いがあるのではないかと思います」という感覚は、実は特別講師間においては当たり前のものとして存在してきた。その感覚を性格特性分析を通して見える化した上で、当学に携わる全教員に共有できないだろうか、と考えるようになったことが本研究を始める主な要因である。

また、2023年度より、本学における基本教育科目の英語表現伝達科目が学部別の英語プログラムの一部へと改編されようとしているが、このことを知ったこのタイミングで、それぞれの学部の特色と学生の性格特性を分析することが、学生が効率的にモチベーションを持って参加できる授業設計に直結すると考え、本研究の主な焦点を、各学部の特性の調査・分析に置いた。

特性の調査方法としては、後に詳細を述べるが、TEG II（東大式エゴグラム）を用いた。それにより学生の個々の性格特性を算出し、その結果を基に学部全体で特性の傾向を分析した。その分析結果と、現／旧特別講師へのヒアリング、数年に渡る個人間のやり取りの履歴、また、学部間の全体的な差異をデータとして観察できるVEL（Virtual English Lounge）への参加度などを参考にしながら考察を加えた。この性格特性分析において、交流分析に詳しい友人の水野慶子氏に多大な協力をいただいたことに心からの謝意を述べたい。

II. 先行研究

学部間における性格特性

ある学科、学部焦点を当てて学生の特性を分析した研究としては、経済学部の学生の特性を分析・考察した北海道大学の研究（伊藤慎之介、2017）や、体育大学の中の教育学部という特色のある学部生の性格分析を行なった研究（土田幸雄、2021）、素朴概念や自己概念の構造から文化系学生の特性を考察した河内（2008）の研究などがある。また、学部間の差異に焦点を当てたものとして、学習方法の調査結果から学部間の差異に焦点を当てた河井（2003）、卒業生の所得やキャリアから見た学部間比較（大谷、松繁、梅崎、2003）、PBL教育の効果的な授業運営を目的として学部特性を分析した金沢工業大学の研究（浦、北川、坂、田中、津田、福江、2018）などが挙げられる。これら学生の特性に焦点を当てた研究の本流にある概念の1つに、より良い授業を行うためには「授業者」が行なった授業を振り返り、評価し、次の授業の組み立てを考える過程において、「学習者」の実態を考慮しなければならない（河井、2003）という考えがあるように思える。本研究においても、当大学のそれぞれの学部における性格特性が導き出し、その実態からより適切な学習スタイルを考察していきたいと考える。

III. 方法

1. 調査対象者

全3学部の1年生のうち希望者101名（男性60名、女性41名）を対象に調査を行ったが、個人データの承諾を求めた際に1名から拒否があったため、残りの100名を分析対象とする。内訳は、人間科学部24名（男性16名、女性8名）、現代経営学部57名（男性39名、女性18名）、グローバル・コミュニケーション学部19名（男性5名、女性14名）である。

2. 調査手段

性格特性の診断には、新版TEG II（以下、TEG II）を使用した。TEG IIは、自己記入式の質問紙法である。1～53の質問項目を順に読み、自分にあてはまる時は「はい」の□に○を、自分にあては

まらない時は「いいえ」の□に○をつける。どうしても決められない時は「どちらでもない」の□に○をつける。

5尺度は、CP、NP、A、FC、ACという5つの自我状態に対応している（表1参照）。各尺度の高低の関係により、人格特性を理解することが可能である。各自我状態は、良い悪いで言えるものではなく、長所と捉えられる部分と短所と捉えられる部分の両面を持っている。下記表1にそれぞれの自我状態の見方を記す。（東京大学医学部心療内科 TEG 研究会、2002）

自我状態	得点が高い場合	得点が低い場合
批判的親 (CP)	<ul style="list-style-type: none"> ・良心にしたがう ・責任感が強い ・建前にこだわる ・完璧主義 	<ul style="list-style-type: none"> ・物事にこだわらない ・のんびりやである ・規則を守らない ・いい加減である
養育的親 (NP)	<ul style="list-style-type: none"> ・他人の世話をする ・思いやりがある ・過干渉 ・おせっかい 	<ul style="list-style-type: none"> ・淡泊である ・さっぱりしている ・冷淡である ・気配りをしない
成人 (A)	<ul style="list-style-type: none"> ・理性的である ・論理的である ・人間味に欠ける 	<ul style="list-style-type: none"> ・構えない ・素朴である ・情緒的である ・情に流される ・思い込みで判断する ・計画性がない
自由な子ども (FC)	<ul style="list-style-type: none"> ・創造性に富む ・感情表現が豊かである ・自己中心的である ・落ち着きがない 	<ul style="list-style-type: none"> ・静かな感じ ・素直である ・引っ込み思案 ・物事を楽しめない
順応した子ども (AC)	<ul style="list-style-type: none"> ・協調性に富む ・従順である ・依存心が高い ・優柔不断 ・自己評価が低い 	<ul style="list-style-type: none"> ・マイペース ・自主的に行動する ・人に気兼ねしない ・自分勝手である ・頑固 ・人と共に行動ができない

表1 TEG IIの自我状態の特徴

3. 調査方法

それぞれの授業時に、下記手順で調査を実施した。

- 1) 研究の目的と倫理事項に関して説明する。
- 2) TEG IIを実施する。分析のため解答用紙を回収。

IV. 結 果

TEG II では、得られた尺度得点をもとに、19種類のパターンに分類できる。その19種類のパターン分類は、下記の通りである。優位型では、1.CP優位型、2.NP優位型、3.A優位型、4.FC優位型、5.AC優位型で、低位型では、6.CP低位型、7.NP低位型、8.A低位型、9.FC低位型、10.AC低位型、混合型では、11.台形型、12.U型、13.N型、14.逆N型、15.M型、16.W型、17.平坦型、18.P優位型、19.C優位型である。収集したデータを19種類のパターンに分類し、その特徴を細かく分析することが、本来の分析方法であると考えられる。しかし、今回その分析方法を行うと、パターン分類毎のデータ数が少なくなり、特徴を浮き彫りにしにくくなることが明らかとなった。そのため、学部の特徴分析の一部としてパターン分析を行うが、その他は、CP、NP、A、FC、ACの5つの尺度を用い分析を中心に行うこととした。

1. 全体での分析と学部間の比較

当学における全体でのTEG IIのパターン分類では、全19パターンに該当者がおり、図1の通りである。5.AC優位型（気づかい、依存的）が最も多く全体の1/4を占め、次いで13.N型（世話焼き、イエスマン）、2.NP優位（暖かく接し、世話焼き）の順に多いことが見て取れる。

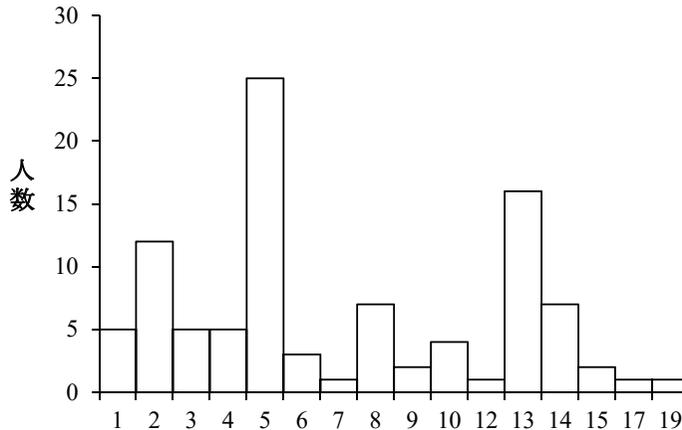


図1 3学部全体のTEG IIパターン分類

学部ごとのTEG IIの5尺度に関する平均値、標準偏差は、表2の通りである。各尺度は20点が上限となる。全体の平均値は、CPが10.9、NPが14.8、Aが11.0、FCが12.3、ACが13.3、人間科学部の平均値は、CPが9.0、NPが13.9、Aが8.7、FCが10.4、ACが14.3、現代経営学部の平均値は、CPが12.0、NPが15.2、Aが12.1、FCが13.1、ACが13.0、グローバル・コミュニケーション学部の平均値は、CPが9.9、NPが14.5、Aが10.5、FCが12.3、ACが13.1である。

表2 全体と学部ごとにおける TEG II の 5 尺度に関する平均値、標準偏差

		CP	NP	A	FC	AC
全体 (100名)	平均値	10.9	14.8	11.0	12.3	13.3
	標準偏差	4.6	3.9	4.9	4.7	4.9
人間科学部 (24名)	平均値	9.0	13.9	8.7	10.4	14.3
	標準偏差	4.7	4.0	5.6	4.6	3.6
現代経営学部 (57名)	平均値	12.0	15.2	12.1	13.1	13.0
	標準偏差	4.4	3.8	4.4	4.8	5.3
グローバル・コミュニケーション学部 (19名)	平均値	9.9	14.5	10.5	12.3	13.1
	標準偏差	4.6	4.0	5.0	4.3	5.1

***p < .001 **p < .01 *p < .05

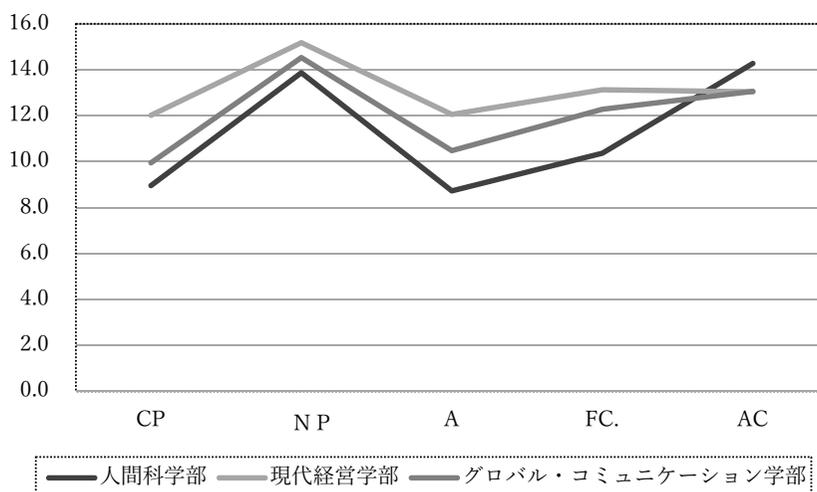


図2 学部ごとにおける TEG II の 5 尺度に関する平均値プロフィール

2. 学部ごとにおける TEG II の特徴と他学部との比較

2-1 人間科学部における TEG II の特徴と他学部との比較

人間科学部の TEG II パターンは、図3の通りである。5 (AC 優位型) が9名 (37.5%)、13 (N型) が5名 (20.8%)、8 が2名 (8.3%) であり、他は、1名のパターンである。AC 優位型とN型で全体の58.3%を占めており、人間科学部は、学部の特徴が比較的強く出ている。他人にNoとすることが苦手な学生が過半数を占めることが示唆される。

他学部と各尺度の平均値の差異を検証するため、1要因の分散分析を行った。表2で示されているように、現代経営学部より、CP (批判的親) とA (成人) が有意に低かった。(F = (2,92) = 4.368、p < .015、F = (2,92) = 4.001、p < .022) 論理的に考えず、理想をあまり追及しない学生が多いことが示唆される。

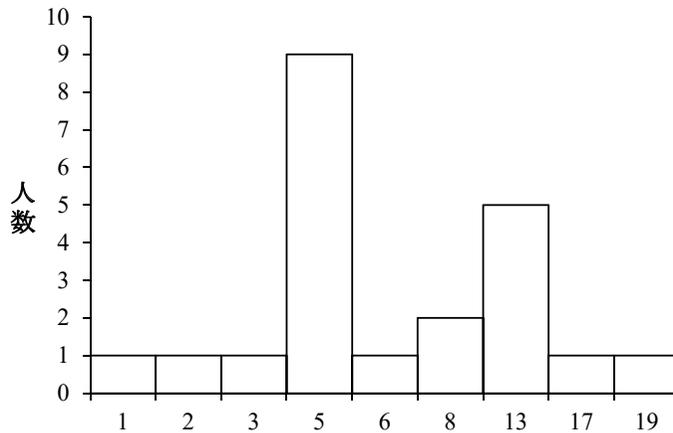


図3 人間科学部 TEG IIパターン分類

2-2 現代経営学部における TEG II の特徴と他学部との比較

現代経営学部の TEG II パターンは、図4の通りである。5 (AC 優位型) が12名 (21.0%)、13 (N型) が8名 (14.0%)、2 (NP 優位型) が7名 (12.3%)、8 (A 低位型) と14 (逆N型) がそれぞれ5名 (8.8%)、1、4、10がそれぞれ4名 (7.0%) であり、他はそれぞれ2名のパターンである。

他学部と各尺度の平均値の差異を検証するため、1要因の分散分析を行った。表2のように、人間科学部より、CP (批判的親) とA (成人) が有意に高かった。(F = (2,92) = 4.368、 $p < .015$ 、F = (2,92) = 4.001、 $p < .022$)

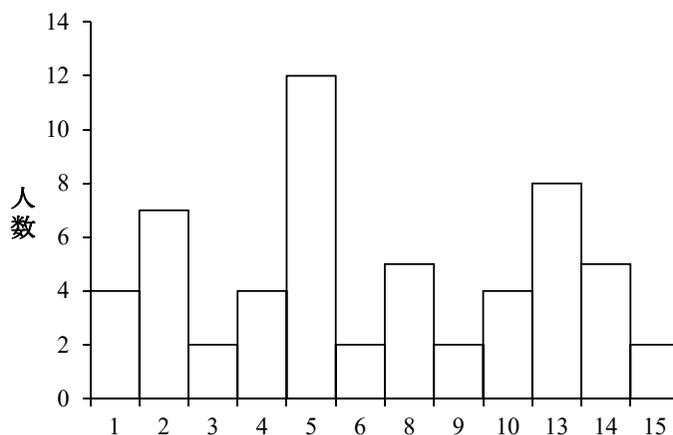


図4 経営学部 TEG IIパターン分類

2-3 グローバル・コミュニケーション学部における TEG II の特徴と他学部との比較

グローバル・コミュニケーション学部の TEG II パターンは、図5の通りである。2 (NP 優位型) と5 (AC 優位型) がそれぞれ4名 (21.0%)、13 (N型) が3名 (15.8%)、3、14がそれぞれ2名 (10.5%)

であり、他はそれぞれ1名のパターンである。7 (NP低位型：人に厳しく、かんしゃく持ち)、12 (U型：気づかいてできるが、自己主張できず葛藤をため込みやすい) の学生がそれぞれ1名ずつおり、攻撃的になりやすい、または、葛藤をためやすい学生が存在することが示唆される。また、他学部と各尺度の平均値の差異を検証したが、平均値では差異がみられなかった (表2)。

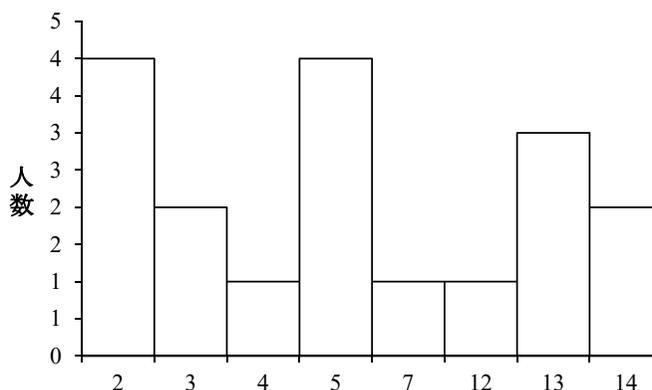


図5 グローバル・コミュニケーション学部
TEG IIパターン分類

以上のように、本研究では、TEG IIという心理検査によって、学生集団の特徴の差異を心理特性レベルで明らかにした。その測定された結果の特徴は、日常で、特別講師が経験的に感じているものに通ずるところがある。データ数の少なさなど研究上の問題点はあるが、特性に関する学部間の有意差の可能性が示唆された。次の章で、その有意差を基に学部別の考察を進めていく。

V. 考 察

1. 人間科学部

分析の結果、最も有意差が見られたのが人間科学部であったが、全体の約40%が5 (AC優位型) = 他人に気遣いNoが言えないタイプに分類された。これは必ずしも悪いことではなく、例えば大学生活の中で、教員から「こうした方がいいですよ」「これをやるべきですよ」と言われたら素直に応じる学生が多いことを示していると考えられる。これを裏付けるデータがあり、本年度 (2022年度) 春学期のVirtual English Lounge (通称VEL) のべ参加数が、グローバル・コミュニケーション学部の1年生が68名、現代経営学部が189名であるのに対して、人間科学部の総参加数は551名となっており、この数字は英語に興味がある学生が多いと思われるグローバル・コミュニケーション学部の学生の約8倍に当たり、指示に素直に従う、という特性が強いことを端的に表しているのではないかと考えられる。また、現代経営学部と比較すると、CP (批判的親)、A (成人) が優位に低いことから、論理的に考えることを好まず、物事にこだわらずおらかな学生が多いと考えられる。これは特別講師間の共通認識だが、人間科学部には論理よりも人間的感情を優先することを好む学生が多いと感じられる

ことが多い。例えば、筆者の担当クラスに限っての事象になるが、中学または高校時代に不登校を経験していたり、現在でも神経発達症を抱えていたりする学生が他学部と比べて明らかに多く存在する。論理的であることよりも人としての感情を大切に思うに至り、だからこそ人間の心理や人間そのものに興味を持ちこの学部を選択したのかもしれない。よって、A（成人）が有意に低いという今回の結果とは真逆になるが、将来のビジョンが明白な学生が多いようにも見受けられる。また、ある特別講師は、“My most lively and proactive class at Toyo has been HS1（自分の受け持つクラスの中で最も活発で積極的なのはHS1だ）”と述べており、そのこともCP（批判的親）とA（成人）が有意に低いことの表れなのでは、と考えられる。

今後の展望としては、人間的な感情を優先する学生が多いという特質において、授業の展開の仕方（論理的すぎない、感情や感覚を優先することへの許容を頭に入れておくなど）や、学生との信頼関係を築いていくことに重きを置くこと、また、将来のキャリアビジョンが明白な学生が少なからず存在すると思われることより、一般英語ではなく彼らの将来に関わる分野に関連性の強いスキルやテーマを選ぶことを念頭に置いた英語プログラムの設計が肝要になる可能性があると言えるだろう。

2. 現代経営学部

前述の通り、人間科学部と比較すると現代経営学部の学生は、CP（批判的親）、A（成人）が有意に高いことが示された。つまり、比較的客観的な視点を持ち合わせている学生が少なくないと言え、実際に特別講師間では、冷静に現状を判断したり将来について客観的に考えているように見える学生が数年前よりも明らかに目に付くようになってきたという印象が共有されている。また、現実認識ができていないと言われる8（A 定位型）と、理想を掲げ責任感が強いとされる14（逆N型）がそれぞれ9%近く存在するが、これは、グループでの作業時に顕著に現れる、非常に真面目に取り組む学生と、殆ど何もやらずに過ごそうとする学生が混在する、という現況の根拠になる可能性があると言えよう。更に、別のデータにおいても同じことが言えるかもしれない。先述の春学期のVELへの参加人数が現代経営学部は189名であったが、人間科学部の突出した多人数551名と、グローバル・コミュニケーション学部の68名とのほぼ真ん中に位置していること、また、参加者の内容において、同一学生が相当数（例：20回以上）参加しており、逆に全く参加しない学生も多く存在することからも、学生の特質が2分化している部分がある、と解釈することができる。

よって、今後の展望としては、この学部内の両極の特性を持つ学生が存在することを考慮したプログラム、コース設計を心がける必要があるかもしれない。また、今後もCPとA優位の特質をもった学生が増え続ける可能性もあり、より明確で確実な将来展望を示すことを念頭においた授業、コース、プログラム設計を勧めたい。

3. グローバル・コミュニケーション学部

グローバル・コミュニケーション学部の学生特性においては、他学部との有意差は見られなかった。しかしながら、この学部特有な結果として、他の2つの学部には存在しなかった特性がいくつか見ら

れたことが興味深い。例えば、他学部には全く見られなかった7 (NP 低位型) や12 (U型) のタイプが見られることから、攻撃的になりやすい、または葛藤をため込みやすい学生が存在する可能性が示されている。これも特別講師間での共通認識にある、グローバル・コミュニケーション学部のクラスは、元気な学生と無気力な学生が混在していて、とにかくクラスが御しにくい、というものの根拠の1つになるのかもしれない。時々元気が良すぎる、他の学生に攻撃的とも見られる態度をとる学生も極少数ながら見られる、といった印象を数年来共有してきており、しばしば“My most challenging class is GC (EC)”といった悩みとも言えるコメントが特別講師から漏れ出ることもある。しかしながら、当たり前かもしれないがやはり英語学習へのモチベーションは3学部の中でも一番高く、クラスレベルが高ければ高いほど、やる気の満ちた積極性の高い学生の数も多い。また、先ほどからデータとして用いているVELで言えば、2022年度春学期の最後に試運転として行った対面式のラウンジタイムの参加者の95%がグローバルコミュニケーション学部の学生であり、終了後のインタビューにて、多くの学生が「コミュニケーションは対面で行いたい」と答えていたことから、オンラインより実際に目の前にいる人との対話を好んでいる学生が多い、という印象を受けた。

今後のプログラム設計について、上記の考察を踏まえてまとめると、上位クラスと下位クラスでは、達成目標をレベルや動機の高低などを考慮した上で作成し、コースのレベルや内容も明白に段階分け・区別化する必要があるのかもしれない。また、さまざまな特性をもつ学生が混在している可能性を考慮し、クラスマネジメントに関するFDの機会を多くすることや、全英語担当教員が情報共有できる場を設定し「御しにくさ」を持っている教員をなくすような工夫が必要になってくるかもしれない。また、できる限り対面での、実践的なコミュニケーションを組み込むこともより良いプログラム設計には必要になる可能性もあると言えよう。

VI. 結 論

特別講師として約5年間3学部の基礎英語及び応用英語クラスを担当し、元及び現特別講師たち6名と共有し続けてきた印象や感覚を根拠のあるものとして公に提示したいと常々思っていたことが、なんとか実現した形となった。勿論、調査人数、年度、クラスそしてレベルによって特性にばらつきが出ることは当然であり、今回の結果が常に一定して示されるわけでもなく必ずしも正しいわけではない。しかしながら、我々が認識していた学部間の差異、それぞれの特性といったものが、データ分析を通して多少なりとも裏付けられたことは非常に興味深く、また、人間の感覚には経験則から生じる何かしらの無意識的な根拠があるのかもしれない、と思わされる結果となった。

今後への全体的な展望としては、英語教育開発委員会主体の全学部共通プログラムから学部別の英語プログラムに移行するこの時期にこの研究ができたことに幸運を感じつつ、できることなら対象人数を拡大して同様の調査を続けていきたいと強く願うものである。そして、今回は分析に焦点を絞ったが、今後は学生への意識調査アンケートなどを併用して、より学部特性を明確にし、より効果的なプログラム作成に貢献していければと願っている。

今回 TEG II というエゴグラムを用いたのは、交流分析という分野に興味をもったおかげであり、そ

の分野での先輩であり、交流分析を紹介してくれた水野慶子氏には、再度あらためてお礼を申し上げたい。また、ヒアリングに快く応じてくれた元特別講師の Jason Pratt、Marnie Maise、Cassandra Guevara、現特別講師の Roy Morris、Darrell Hardy の各氏に心からの感謝を申し上げたい。最後に、非常に時間のかかるエゴグラムへ回答してくれた101名の学生に、最大限の感謝を伝えて本稿の締めとさせていただきます。

参考文献

- Dörnyei, Zoltan (2001). *Motivational Strategies in the Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dörnyei, Z., & Ushioda, E. (2013). *Teaching and researching: Motivation*. Routledge.
- 浦 正広、北川 達也、坂 知樹、田中 泰司、津田 敏宏、福江 高志 (2018) プロジェクトデザイン科目の効果的な授業運営に向けた学部特性の分析 207 プロジェクトデザイン科目の効果的な授業運営に向けた学部特性の分析)
- 河内和直 (2008) 「文科系学生」の特性を探るーその素朴概念と自己概念の構造からのアプローチー 文京学院大学人間学部研究紀要 vol.10 no.1 pp.255-264
- 小宮あすか・布井雅人 (2018) Excelで今すぐはじめる心理統計 簡単ツールHADで基本を身につける
- 清水裕士 (2016) フリーの統計分析ソフトHAD: 機能の紹介と統計学習・教育、研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究 第1号 pp59-73
- 新保幸洋 (2017) YGPIを用いた教職課程履修学生の性格類型分析 東邦大学教養紀要 第49号 pp23-30
- 高橋久 (2004) 12歳からのエゴグラム 学校で生きぬくための心理学 ペんぎん書房
- 辻岡美延 (2000) 新性格検査法ーYG性格検査 応用・研究手引きー 日本心理テスト研究所
- 東京大学医学部心療内科 TEG研究会編 (2002) 新版 TEG 解説とエゴグラム・パターン 金子書房
- 畑野快、溝上慎一 (2013) 大学生の主体的な授業態度と学習時間に基づく学生タイプの検討 日本教育 工学会論文誌 vol.37 no.1 pp.13-21
- 原和裕、稲積宏誠 (2013) 学生意識調査の有効活用に向けて 退学者の予兆発見・電子情報通信学会 2018年総大会 情報・システムソサイエティ特別企画 学生ポスターセッション予稿集 p.189